

地域を定めず指定する 天然記念物

コウノトリ

指定年月日: 1956(昭和31)年7月19日 所在地: 地域を定めず指定する

DATA

学名 *Ciconia boyciana*

指定種別

1953(昭和28)年6月17日、国指定

その他

1993(平成5)年、国内希少野生動物種

体長約110cm、翼を広げた長さは約2mにもなる大きな鳥です。ロシアや中国で繁殖し、日本には渡り鳥として飛来します。沖縄では、沖縄諸島、宮古・八重山諸島に飛来した記録があります。

江戸時代までは日本でも繁殖し、全国で見ることができましたが、乱獲や農薬などの影響で、1971年に日本産のコウノトリは絶滅しました。

現在、兵庫県では人工繁殖の他、人工飼育で育った個体を野外に放す取り組みが進められています。

赤ちゃんを運んでくる言い伝えがあるのは、ヨーロッパに生息する同じコウノトリ科のシュバシコウという鳥で、本種とは異なります。



リュウキュウアオヘビを捕食する様子

撮影日: 2016年4月2日

撮影地: 古宇利島



コウノトリ

撮影日: 2016年1月2日

撮影地: 今帰仁村諸志

*

アホウドリ

指定年月日:1962(昭和37)年4月19日 所在地:地域を定めず指定する

地域を定めず指定

DATA

学名 *Phoebastria albatrus*

生息場所

南小島、北小島(尖閣諸島)、鳥島(伊豆諸島)

指定経緯

1958(昭和33)年4月25日、旧指定「鳥島のアホウドリおよびその繁殖地」(所在地:鳥島)

1965(昭和40)年5月10日、別名称・現所在地に変更
その他

1993(平成5)年、国内希少野生動物種

国指定特別天然記念物

動物

アホウドリは、翼を広げると2m以上になる大型の海鳥です。海の上をグライダーのように飛びながら、魚やイカなどを捕まえて食べます。北太平洋地域に広く分布していますが、繁殖が知られているのは、世界でも伊豆諸島の鳥島及び尖閣諸島の南小島と北小島だけです。かつては伊豆諸島や小笠原諸島、大東諸島や尖閣諸島などで、およそ600万羽が生息していたといわれますが、羽毛や卵採集などのために乱獲され激減してしまいました。尖閣諸島でも1939年から発見されず、絶滅したと考えられていましたが、32年後の1971年に南小島で12羽が再確認されました。その後1988年に南小島で、2001年には北小島でも生息・繁殖が確認されました。

アホウドリは一夫一妻のつがいを形成し、

死ぬまで相手を変えないといわれています。10月下旬から11月中旬に産卵し、一腹卵数は1個で、抱卵、給餌は雌雄で行います。ふ化したヒナは、5月中旬から6月中旬に島を離れ、4~5年後に戻ってくるといわれています。

現在は、鳥島では250つがい以上が繁殖し、個体数は約1400羽、尖閣諸島の南小島では50~55つがい繁殖し、個体数は約250羽と推定されています。



アホウドリ



つがい



親子

用語の解説

一腹卵数

1回の子育て(営巣)で、巣の中に生み出された卵の総数。

ノグチゲラ

指定年月日:1977(昭和52)年3月15日 所在地:地域を定めず指定する

国指定特別天然記念物

動物

ノグチゲラは、世界中で沖縄島だけに生息する全長約30cmになるキツツキです。明治以前には恩納村と金武町にまたがる恩納岳でも見られており、1920年代初頭には名護市でも採集されています。その後は1985年の名護市の記録を最後に、生息地はやんばる3村(国頭村、大宜味村、東村)だけになっていましたが、近年再び名護市で確認できるようになっています。本土に生息するアカゲラの仲間に近いとも考えられていますが、キツツキの仲間では一番原始的と言われています。また、キツツキの中では一番分布範囲が狭い種類になっています。

繁殖期は3～5月頃で、この時期には森の

あちこちから「ダダダダー」と激しく木をつつく音が聞こえます。イタジイなどの枯れているか半分枯れている木の幹や太い枝に、くちばしでつついて穴を掘って巣を作っています。この巣の中に、2～5個の卵を産みます。卵は産卵からおおよそ2週間でふ化し、ヒナはふ化後27日くらいで巣立ちます。巣立つヒナは、平均すると2～3羽とされています。



アカメガシワの実をついばむオス(下)と、デイゴの枝に止まるメス(上)。オスは頭の上が赤く、メスは黒いことで区別できます。キツツキの仲間には一般的には小枝などに止まることはできませんが、ノグチゲラは普通の野鳥のように、小枝に止まって餌をとったりします。

学名 *Sapheopige noguchii*

生息場所

沖縄島(国頭村、大宜味村、東村、名護市)

指定経緯

1955(昭和30)年1月25日、琉球政府指定

「のぐちげら」(所在地:沖縄本島)

1972(昭和47)年5月15日、国指定「ノグチゲラ」

その他

1993(平成5)年、国内希少野生動植物種

一夫一妻制で年に一回だけ繁殖しますが、相手を変えて繁殖することはないと言われています。野外調査では11年間つがいを維持した例も観察されています。抱卵や抱雛、ヒナへの給餌などを雌雄で行いますが、夜間の抱卵や抱雛はオスが行っています。現在の生息数は300~500羽くらいと言われ、絶滅が心配されています。



※※

使われなくなったノグチゲラの巣木を切って、巣の断面を示した標本(沖縄県立博物館・美術館所蔵)。巣木に取り付けたノグチゲラのはく製の頭のところが入口です。入口から入ると、中は上にドーム状の空間があり、巣内で反転しやすくなっています。巣穴の直径は6~8cm、深さは70cm程あります。巣穴の底には木くずなどがしかれ、柔らかくなっています。



※※※

地上で餌をさがすノグチゲラのオス。一般にキツキ類は脚のつくりが骨にとまるように特別に変化したので、地上に下りて餌をさがすことはしません。ところが、ノグチゲラのオスは普通の野鳥のように、地上に下りて餌をとったりする特徴があります。



※※

名護市で発見された巣木。2013年10月1日に名護市内の森で見つかりました。リュウキュウマツに囲まれた巣穴で、巣穴の状況から使用されたものと考えられました。その後名護市においては、巣立ちも確認されています。

イリオモテヤマネコ

指定年月日: 1977(昭和52)年3月15日 所在地: 地域を定めず指定する

DATA

- 学名 *Prionailurus bengalensis iriomotensis*
- 生息場所 西表島
- 指定経緯 1967(昭和42)年4月11日、琉球政府指定
1972(昭和47)年5月15日、国指定
- その他 1994(平成6)年、国内希少野生動物種

国指定特別天然記念物

動物

イリオモテヤマネコは、西表島だけに生息する野生のネコです。発見された時には、**一属一種**のネコ類と言われていましたが、現在は中国大陆に生息するベンガルヤマネコの亜種と考えられています。九州(長崎県)に生息するツシマヤマネコは、親戚にあたります。体長は50~60cmで、オスの方が少し大きいです。

イリオモテヤマネコの特徴の一つは、餌となる動物の種類数が多いことです。シロハラクイナやシロハラといった鳥類から、キシノウエトカゲやサキシマヌマガエルなどの爬虫類、昆虫類や魚類、ネズミ類などを捕まえて食べています。小さな島の中で生き残るためには、何でも食べなければならなかったの

でしょう。繁殖活動は12~3月頃に発情し、4~6月に出産・子育てをし、10~11月にこどもが独り立ちすると言われています。現在の個体数は100頭くらいと推定されています。八重山の島々の成り立ちの歴史や、日本のネコ科動物の進化や変化を考える上で貴重なネコだと考えられています。



写真: 環境省西表野生生物保護センター提供

イリオモテヤマネコの毛皮標本。1965年に、こうした資料が発見され、2年後の新種発表につながったと言われています。

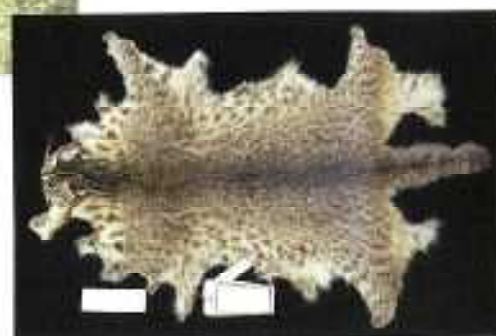


写真: 佐々木 雄彰

用語の解説

一属一種

生き物を体の特徴などをもとにグループ分けすると、子孫を残すことができる最小の単位を種といい、特徴が近い種をまとめたものを属というんだ。イリオモテヤマネコは、発見当初は特徴が近い種が見当たらないと考えられたので、一属一種とされたんだね。

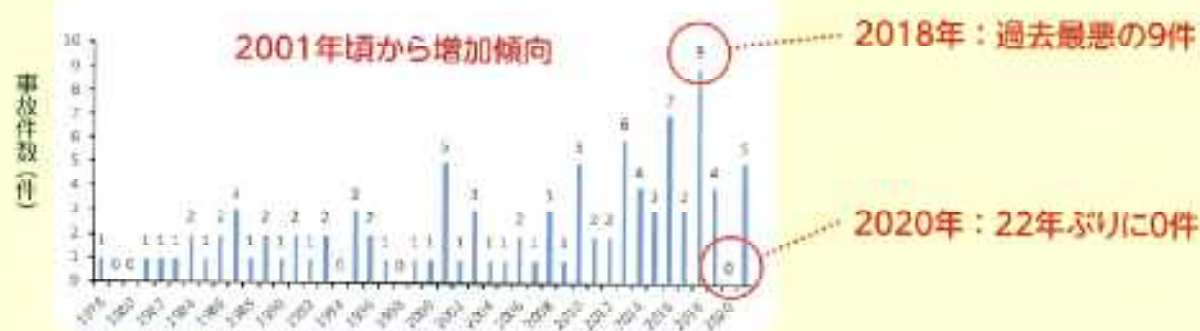




イリオモテヤマネコの交通事故について

沖縄県内の道路では、天然記念物を含む多くの動物たちが交通事故に遭い命を落としています。西表島に100頭ほどしかいないとされるイリオモテヤマネコも例外ではなく、毎年多くが交通事故に遭っています。

〈イリオモテヤマネコの交通事故発生件数〉



イリオモテヤマネコの年別事故件数 (1978年～2021年10月)

資料：環境省西表野生生物保護センター提供

〈交通事故が起こる原因として考えられること〉

- ヤマネコの生活圏内に道路が通っている。
- 自動車にひかれた生物を食べに道路上に出てくる。
- 幼獣は警戒心が薄く、車や人を恐れず道路に出てきてしまうことがある。
- 明け方や夕暮れ時の薄暗い時間帯に活発に行動するため、路上で発見しづらい。
- 自動車の速度超過による運転 (制限速度：県道は時速40km、集落等の一部は時速30km)

〈交通事故防止の取り組み〉

イリオモテヤマネコの交通事故発生防止のため、環境省、竹富町、沖縄県、地元団体、ボランティアなどが協力して、生態・行動調査、普及啓発、目撃情報の収集、道路沿いの草刈り、看板設置などを行っています。

例：環境省西表野生生物保護センター作成「イリオモテヤマネコ運転注意マップ」



資料：環境省西表野生生物保護センター提供

〈イリオモテヤマネコを交通事故から守るためできること〉

1. 車の制限速度 (県道は時速40km、集落内の一部は時速30km) を守る!
2. 「ヤマネコ注意」の看板がある場所では運転に特に注意する!
3. 「イリオモテヤマネコ運転注意マップ」を活用する!
4. ヤマネコの目撃情報をセンターに提供する!

西表野生生物保護センターHP: <https://iwcc.jp/>

目撃情報
などから、要注意
地点などが、毎月
更新されて
いるよ。



カンムリワシ

指定年月日:1977(昭和52)年3月15日 所在地:地域を定めず指定する

DATA

学名 *Spitarnis cheela perplexus*

生息場所

沖縄県内における分布:

八重山諸島(主に西表島、石垣島)

指定経緯

1972(昭和47)年5月15日、国指定

その他

1993(平成5)年、国内希少野生動物種

県内で繁殖しているワシタカ類のうち最大の

の種で、全長は約55cmにもなります。

成鳥の体の色は、全体的に茶褐色でお腹

の部分に白い小さな斑点がまばらにあります

が、幼鳥の時は全体的に白色をしています。

後頭部に冠のような長い羽毛があり、興奮し

た時に立てる羽毛が冠をかぶっているように

見えることから、カンムリワシと名付けられま

した。

山すその森や川沿いの森にすみ、ネズミ

や小鳥、ヘビ、トカゲ、カエル、カニなどを食

べます。カンムリワシは東南アジアのほか、

日本では八重山諸島だけに生息し、ここが分

布の北限になります。また八重山諸島のカン

ムリワシは、他の地域のものより体が小さい

など、少し特徴が違うとも言われています。



成鳥

*



幼鳥

*



道路に張り出した枝や電柱に留まっているのを見かけます。



雨の日に、地面に下りてエサを探している様子。開けた場所にも下りることがあります。



交通事故について

カンムリワシは、カエルやトカゲ、鳥などのほか、甲殻類やミミズ、昆虫など様々な種類の生き物をエサとして利用しています。また、エサの捕り方は、「待ち伏せ型」と言われ、道路脇の電柱や海岸、水田の脇など、見通しの良い場所で生き物が現れるのを待って、捕まえるといった狩りの仕方をします。

近年、カンムリワシが車に轢かれる事故が後を絶ちません。その理由は、道路で轢かれた生き物を食べようと近づいた際に車と接触してしまうのです。2011年以降、事故に遭った数を見ると、

2021年までの11年間で合計130羽が被害に遭っています。

カンムリワシは生息数や繁殖についてまだわからないことが多く、このまま交通事故が続くと、絶滅も危ぶまれてしまいます。

それを避けるために、環境省や地元自治体に加え、野生動物ドクターや、保護団体が中心となって、交通事故防止に向けた取り組みや、怪我をした個体の救護活動を行っています。

アカヒゲ

指定年月日:1970(昭和45)年1月23日 所在地:地域を定めず指定する

DATA

学名 *Luscinia komadori*

生息場所

男女群島、屋久島、種子島、黒島、奄美諸島、徳之島、
沖縄島、慶良間諸島、石垣島、西表島、与那国島

指定経緯

1955(昭和30)年1月25日、琉球政府指定

「あかひげ」(所在地:沖縄本島)

1975(昭和50)年8月7日、現名称に変更

その他

1993(平成5)年、国内希少動植物種(アカヒゲ、
ホントウアカヒゲ)

国指定天然記念物

動物

アカヒゲは体の大きさが約14cmで、スズメ
くらいの大きさで、山地の谷川沿いの森でよ
く見られる鳥です。好奇心が旺盛で、遠くに
いるのを見つけた時に、座り込んでじっとし
ていて、徐々に近づいてきます。時には靴
の上にとまったりして、驚かされます。長崎
県男女群島から八重山諸島までの広い範囲
で見つかります。沖縄島では、1960年代ま
では恩納村で、2008年までは名護市でも見
られたようですが、現在の生息地は国頭村、
大宜味村、東村に限られています。

羽色や黒ひげ模様の違いなどから、鹿児島
島の徳之島と奄美大島、長崎県の男女群
島にいるものはアカヒゲ、沖縄島のものはホ
ントウアカヒゲと呼ばれ区別されています。
アカヒゲは奄美諸島から北の地域で繁殖
し、その一部は冬を過ごすため鹿児島県の

種子島や宮古・八重山諸島に渡ってきます。
一万、ホントウアカヒゲは渡りを行わず沖縄
島だけで繁殖しています。

最近の研究では、アカヒゲとホントウアカ
ヒゲは形態的にも遺伝的にも大きく違うこと
が分かっています。琉球列島の成り立ちと、
島と関連した動物たちの進化を考える上で、
貴重な鳥といえます。



水辺に出てきたアカヒゲのオス。目元から胸元にかけての黒
い模様が目立ちます。まるでひげを伸ばしているように見え
るところから、アカヒゲと名付けられました。



小枝に止まるメス。オスと違って、こちらは黒
いひげはありません。



巣作りから幼鳥の独立まで

01 巣を作る



岩の割れ目に作られたアカヒゲの巣。こうした場所以外にも、枯れた樹木やオニヘゴなどのほらの中等、雨が直接あたらないような場所に巣を作ります。

02 卵を産む

アカヒゲの巣と卵。枯れ葉やコケなどを持ち込んで作った巣内に、4個の卵を産んでいました。アカヒゲが一回に産む卵は、2～4個です。繁殖期は3月から6月頃で、繁殖期には、オスが巣を中心に縄張りをつくり、他のオスが入ってくると追い払ってしまいます。卵を温めるのはメスの役目で、およそ13日でふ化します。



03 ヒナを育てる

巣の中のアカヒゲのヒナ。飼育は、オスとメスが共同で行います。生まれたヒナはおおよそ14日くらいで巣立ちます。巣立ち後は、しばらくはオスとメス、巣立ちヒナの家族で一定の範囲の中で生活し、約1カ月くらいで巣立ちヒナは完全に独立します。



04 幼鳥の独立



独立したアカヒゲの幼鳥。幼鳥の頃は、体の色はおとなのメスとよく似ています。オスの場合、もう少しすると、胸元のひげが目立つようになります。

オカヤドカリ

指定年月日:1970(昭和45)年11月12日 所在地:地域を定めず指定する

DATA

オカヤドカリは、文字通り「陸」で生活するヤドカリです。採餌^{さいじ}の他、オスからメスへの精子^{せいし}の受渡しや受精^{じゅんしん}・産卵^{さんらん}まですべて陸上で行いますが、ふ化した幼生^{ようせい}は海中でなければ生きられません。受精卵^{じゅんしんらん}を腹部^{ふくぶ}に抱えたメス親^{おや}は、卵^{たまご}の中で幼生^{ようせい}が十分発達すると波打ち際に降りて海水に浸り、宿貝^{しゆくがい}を前後に激しく揺すりまわります。このとき海水に触れた卵^{たまご}がはじけ、幼生^{ようせい}が海中にまき散らされるのです。これを「放幼生^{ほうようせい}」と言い、夏の夜、特に大潮の満潮時刻あたりに集中して行われます。幼生^{ようせい}はプランクトン生活をしながら脱皮・成長し、渚で小さな蒼貝^{そうがい}の殻を拾って莖^{くき}の暮らしを始めます。

オカヤドカリは、成長に伴って宿貝^{しゆくがい}を大きなものに替えていきますが、適当な貝殻^{かいがら}が

- 学名 *Coenobita caryopus* (オカヤドカリ)、
C. purpureus (ムラサキオカヤドカリ)、
C. rugosus (ナキオカヤドカリ)、
C. brevinanus (オオナキオカヤドカリ)、
C. violascens (コムラサキオカヤドカリ)、
C. perlatus (サキシマオカヤドカリ)

生息場所

沖縄県内における分布：オカヤドカリ、ムラサキオカヤドカリ、ナキオカヤドカリ、オオナキオカヤドカリ、コムラサキオカヤドカリは県内全域、サキシマオカヤドカリは石垣島・黒島・宮古諸島水納島

見つからないときは他のオカヤドカリから奪い取ったりもします。沖縄では、大型個体はよくアフリカマイマイの殻に入っています。魚の死骸や腐った果実など何でも食べてしまうので、海岸の掃除屋としても重要な存在です。



オカヤドカリ



コムラサキオカヤドカリ



オオナキオカヤドカリ



ナキオカヤドカリ



ムラサキオカヤドカリ



サキシマオカヤドカリ



オカヤドカリの放幼生の瞬間。焦げ茶色の点々が放出されたゾエア幼生です。

*



宿貝の争奪戦。宿貝を奪おうとしている個体と、奪われそうになっている個体の前後左右に、貝殻の「おこぼれ」を狙う個体の列が出来ています。

*

用語の解説

プランクトン

水中で浮遊生活をする生き物。泳ぐための体のつくりを持たないため、水の流れに逆らうことができないのが特徴。

何でも食べるオカヤドカリ

オカヤドカリは非常に優秀な海岸の掃除屋で、落ちている有機物はおおよそ何でも食べてしまいます。マーシャル諸島の海岸では、オカヤドカリがハエの発生数を少なくするという研究例があります。動物の死骸等にウジが湧く前にオカヤドカリたちが片付けてしまうという訳です。

京文化財課は、2005年に糸満市大度海岸でオカヤドカリ調査を行いました。広いビーチの方ではなく、駐車場から東に150mぐらい歩いたところにある小さな入り江が調査地点です。ある時、近くの井戸からお供え物のリンゴが流れ着きました。どうなるか気にしていると、日没後、オカヤドカリたちが群がってきて数時間でほぼ芯だけにしてしまいました。セミの死骸、餅、犬の糞も食べていました。ヤシの実も流れ落ちて数日間、そのままの形で転がっていたので、さすがに硬すぎてオカヤドカリの手（ハサミと言わなければならない）には負えないのだと思いました。ところが、あるオカヤドカリが硬い果皮を切り開くと、その他の運中も集まってきて食べ始めました。

ところで、オカヤドカリは卵嚙ではごくあり

ふれた動物ですが、余りヒトには食べられていないようです。天然記念物に指定されてからは法律的にできませんが、昔のことを尋ねたアンケート調査でも、食べたという事例は少なく、その状況も「子どもの頃食べたことがある」、「戦後の食糧難の時食べた」といった具合でした。海岸の貝類のように普通な感じで食卓に上るものではなかったのです。拍まえるのは同じぐらい簡単なのに何故でしょう？単においしくないのかも知れませんね。ただ、オカヤドカリがいろいろな物を食べてしまうのを知っている、というのも答えの一つとしてありそうです。腐ったものや動物の糞等を食べているのはよく目にする光景です。ましてや、風葬が行われていた時代には遺体に群がっているところを見ていたかも知れません。オカヤドカリがこの世とあの世を繋ぐ聖なる存在とされることがあるのは、この辺の事情が関係しているようですが、ともかく食欲増進に全く結びつかぬことははっきりしています。「オカヤドカリは余りにも何でも食べてしまうので、ヒトには食べられない」という仮説はいい線いっているのではないのでしょうか。



リンゴを食べる *



セミの死骸を食べる *



餅を食べる *



バナナの皮を食べる *



ヤシの実を食べる *



魚の死骸を食べる *

天然記念物調査（アマキリマ）

天然記念物オカヤドカリを調査していた時の話です。調査のきっかけは、沖縄県におけるオカヤドカリの実態がよくわからなかったこともあり、1981年から調査が始まりました。当時、よく知られていたオカヤドカリは、オカヤドカリ (*Coenobita carypes* Stimpson, 1858)、ナキオカヤドカリ (*Coenobita rugosus* H. Milne Edwards, 1837)、ムラサキオカヤドカリ (*Coenobita purpurans* Stimpson, 1858) の三種類でした。

オカヤドカリというと、熱帯域の動物だというイメージがあったのですが、ナキオカヤドカリ以外の二種は日本で発見された種類ということがわかりました。オカヤドカリは、Loo-Chooで模式標本（種の基準となる標本）が採集されています。その後の研究で、Loo-ChooのChine（琉球の金武）ということがわかりました。ムラサキオカヤドカリは、Bonin IslandsとAmakirima Islandsで模式標本が採集されています。Boninは小笠原です。Amakirima Islandsは琉球のようですが、どこでしょうか。この二種ともスティンブソン (Stimpson) が1858年に新種として発表していますが、これらは1853～1856年にかけて行われた北太平洋探検隊の遠征で得られたものです。実は、スティンブソンは、旗艦ビンセンス号率いる北太平洋探検隊の一員として、小笠原や琉球で調査をしていたのです。その頃というと、ペリー艦隊が琉球にやってきた時期と重なります。探検隊の主な任務は、ペリー艦隊が開いた太平洋航路に関係する調査でした。

天然記念物調査で、オカヤドカリ類の本拠地（模式産地）が沖縄だったことを知ったのは意外でした。また、ペリー艦隊に代表される米国の東

アジア進出とも関係していることにはさらに驚きました。同時期、探検隊によって、琉球で採集され、新種として記載された動物には、オキナワアオガエル、オキナワキノボリトカゲ、オキナワトカゲ、リュウキュウアオヘビ、ハブがあります。その中でも注目されるのがオキナワキノボリトカゲです。新属新種として記載されました。その模式産地がAmakirima Island となっています。Amakirimaはキノボリトカゲ属の模式産地にもなっているのです。よく知られている毒蛇ハブ。これも模式産地がAmakirimaと記録されています。

アマキリマ (Amakirima) はどこでしょうか。『ペリー日本遠征記』には地図が掲載されており、ちょうど慶良間諸島の位置にAmakirima Islandsが示されています。なぜ、慶良間がアマキリマ (Amakirima) になるのでしょうか。パジルホールをはじめ、外国からの訪問者が増えた当時の様子を想像してみましょう。

外臣人が那覇のウチナーンチュに質問した。

「あの島は何と呼んでいるか」

ウチナーンチュが答える。

「アマキリマやさ（あそこは慶良間だ）」



那覇の風景 (Hawks, ed. 1856より)
那覇から見た慶良間諸島が描かれている。

ジュゴン

指定年月日: 1972(昭和47)年5月15日 所在地: 地域を定めず指定する

DATA

学名 *Dugong dugon*

指定経緯

1955(昭和30)年1月25日、琉球政府指定(備長)
(所在地: 琉球近海)

ジュゴンはインド洋・太平洋の熱帯域を中心に分布し、沖縄はその北限にあたります。ウミヒル毛などの海草を主食とし、体長3mほどになる海牛目の哺乳動物です。人魚のモデルとして有名ですが、沖縄でも古くから神秘的な存在とみられてきたようです。大宜味村謝名城のウンジャミでは神の乗物と歌われ、今帰仁村古宇利島の創世神話では人間に生殖方法を教える生き物として登場します。津波を呼ぶ動物としての伝説も先島諸島に伝わっています。

沖縄各地の先史時代の遺跡からは、ジュゴンの骨がしばしば出土しますので、大昔

の人々はこの動物を食べていたのでしょう。首里王府は、八重山諸島新城島の人たちにジュゴンの漁を認め、税として納めさせていました。明治以降は各地で捕獲されるようになり、数が激減してしまいました。近年の調査では、海草の食み跡や個体の目撃例が古宇利島、伊良部島、西表島などの周辺ではありますが、その数は限られています。

国指定天然記念物

動物



写真提供: 馬羽水族館

馬羽水族館で飼育されている「セレナ」はメスの個体です。

用語の解説

ウンジャミ

海の彼方にあると信じられているニライカナイから神を迎え、農作や人々の健康・安全などを予祝する(前もって祝う)行事。ウンガミ、ウンザミとも呼ばれる。



人と比較すると大きいことが分ります。

写真提供: 馬羽水族館



自然のジュゴン。沖縄本島北部の海で撮影

写真：船橋海



親子の写真

写真：船橋海



アマモを食べる飼育個体。ジュゴンの主な餌はウミヒルモやリュウキュウスガモ等の海藻です。

写真提供：自羽水族館



食み跡。ジュゴンが餌を食べた跡が跡になっています。これを「ジュゴントレンチ」と呼びます。

写真：一般財団法人沖縄環境科学センター 小澤 聖之

用語の解説

海牛目

海牛目の仲間には、ジュゴン科とマナティ科の2つが含まれているんだよ。今でも見られるのは、ジュゴンとマナティだけなんだけど、もう1種類、ステラーカイギュウという生き物もいたんだ。体長が最大8mとジュゴンの2倍以上の大きさで、ベーリング海という寒い地域に生息していたそうだよ。18世紀半ば頃発見されたんだけど、残念なことに、人が乱獲した結果、発見されてからわずか27年間で絶滅したと言われているんだ。また、2017年にはロシアでステラーカイギュウの全身骨格が見つかったと報告されているよ。動きが遅くて捕まりやすいことで、絶滅に追いやられたと言われているんだ。



砂浜に打ち上げられたジュゴンの死体(1988年1月佐敷町)。現在、行政や民間など関係機関が協力してジュゴンを保護するための取組が行われています。



写真：山田 昌道



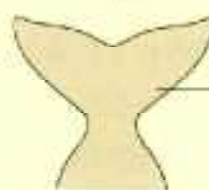
マナティとジュゴンの簡単な見分け方

マナティの尾



丸い

ジュゴンの尾



三角形

ジュゴン^{ジュゴン}は戦前から天然記念物だった？

『沖縄の文化財』は、琉球政府文化財保護委員会が1963年に刊行した文化財のガイドブックで、復刊後は県教育委員会が数年おきに版を改めながら刊行してきました。『みんなの文化財図鑑』シリーズの前身にあたる書籍です。古い文化財の本は、現状と合わない内容もあり価値が低いと思われるかも知れませんが、写真も含め、指定文化財の過去の状況を知るうえでは役立つ資料です。

さて、ジュゴンについてですが、1963年版『沖縄の文化財』には下の記述があります。1975年版までは同内容で、それ以降の版では削除されています。

「じゅごんは、泳ぐのがのろいために手あたり次第にとられて数が少なくなり、絶滅のおそれがあるので戦前から天然記念物に指定されていた。」

ジュゴンは1955（昭和30）年1月に琉球政府によって天然記念物に指定されました。琉球政府が最初に指定した9件の天然記念物のうちのひとつです。そして、沖縄の本土復帰と同時に国の天然記念物になっています。ちなみに文化財は同じジャンルで上位の指定を受けると、それまでの指定は解除されますので、「国指定かつ県指定」という状態は存在しません。戦前は沖縄県の文化財保護条例がありませんので、上記の「指定」があったとすれば国指定と言うことになります。すると、既に指定されていたジュゴンを1972（昭和47）年に再度指定したのでしょうか？余りありそうもない話ですが、本に明記されているので釈然としません。そこで、調べてみることにしました。

文部省の『史蹟名勝天然記念物一覧 昭和18

年1月』には、これを刊行する前に指定した物件が、指定解除されたものもきめて、載っています。これを調べたところ、ジュゴンはありませんでした。これ以降については、適当な「一覧」が参照できなかったの、官報告示をチェックしてみました。ちなみに、天然記念物に限らず文化財の指定は官報告示した時点で有効となります。1950（昭和25）年以前の史蹟名勝天然記念物保存法（旧法）には、告示なしで指定する「不告示」という制度があってややこしいのですが、これは告示によって登録を誘発するおそれのある希少植物に適用された制度で、元々水産資源として漁獲されていたジュゴンには関わりありません。さて、話を官報に戻しますと、1950（昭和25）8月までの旧法施行期間にジュゴンの指定告示はありませんでした。つまり、「ジュゴンは戦前天然記念物に指定されていなかった」というのが結論です。

琉球政府文化財保護委員会の関係者が「戦前指定」と思い込んだ理由はよく分かりません。可能性として考えられるのは、内務省が1920（大正9）年に刊行した『史蹟名勝天然記念物保存要目』の記述の取り違えです。保存要目は、前年施行されたばかりの旧法でどのような物件を指定するのか具体例をあげて説明していて、その中に「沖縄ノ儒艮」があったのです。ただ、これには「説明ノ便宜ノ爲ニセルモノニシテ直ニ之ヲ指定スルノ趣旨ニアラス」と注意書きもあるので、どうでしょうか。今となつては確かめるすべもなくモヤモヤしたままになっています。

※旧法では「天然記念物」と表記します。

トゲネズミ

指定年月日: 1972(昭和47)年5月15日 所在地: 地域を定めず指定する

DATA

学名 *Tokudata muenninki*

生息場所

沖縄県(国頭村、大宜味村、東村)、徳之島、奄美大島

その他

2016(平成28)年、国内希少野生動植物種(オキナワトゲネズミ、アマミトゲネズミ、トクノシマトゲネズミ)

トゲネズミは背中一面に、かたいトゲのような毛を持つ風変わりな野ネズミです。体の大きさは12~18cm、しっぽの長さは10~13cmです。山地の二次林などに暮らしていて、林の中に落ちている木の実や、落ち葉の下の小動物などを食べます。大きな木や石の根元などに巣穴を掘り、餌を採る時以外はその中に隠れています。

主に夜活動すると考えられてきましたが、最近の研究結果からは、昼夜関係ないことがわかってきました。

沖縄島に生息するのはオキナワトゲネズミと呼ばれ、兄弟にあたる種類が鹿児島県の

奄美大島と徳之島に生息するアマミトゲネズミとトクノシマトゲネズミです。また、親戚にあたるトゲネズミがインドネシアのスラウェシ島に生息しています。これらのトゲネズミたちの分布は、それぞれの島の歴史と関係しています。トゲネズミのように、離ればなれに生息する動物について調べると、琉球列島の島々の歴史を知ることができます。

国指定天然記念物

動物



川縁に出てきて餌をさがすトゲネズミ。時折落ち葉の中に頭を突っ込んで、落ち葉を払うような仕草を見せていました。

トゲネズミの背中の毛。通常の細い毛に混じって、太くて硬い毛が生えています。これがトゲネズミの名前の由来です。

ケナガネズミ

指定年月日: 1972(昭和47)年5月15日 所在地: 地域を定めず指定する

DATA

学名 *Diplothrix legata*

生息場所

沖縄島(国頭村、大宜味村、東村)、徳之島、奄美大島

その他

2016(平成28)年、国内希少野生動物種

ケナガネズミは、体の大きさが22~33cm、しっぽも含めると46~70cmにもなる日本最大の野生ネズミです。山地の森林で暮らしており、沖縄島北部の方言では、「ヤマアージ」や「アージ」と呼んでいます。主には木の上で生活していると考えられますが、山中の道路などを横断する姿もよく見られます。するどいツメをうまく使って、幹をかけ上ったり、枝の上をすばやく動き回ります。時には枝から枝へ飛び移ることもあります。

イタジイの老木の洞などに、細い枝などをたくさんつめこんで巣にしています。昼間はこの中でじっとして、夜になると木の実

などを探しに出かけます。現在、ケナガネズミは沖縄島や鹿児島県の徳之島、奄美大島だけに生息していますが、化石は沖縄島南部や久米島、中国東部の安徽省などで見つかっています。ケナガネズミがどこからやってきたのかを知ることは、沖縄諸島や琉球列島の成り立ちを知ることに繋がると考えられます。



夜間に樹上で食事をするケナガネズミ。ケナガネズミは雑食性ですが、主にはアカメガシワやイタジイ、リュウキュウマツなどの樹木の実を食べます。植物によって実のなる時期が違いますので、ケナガネズミの食べる実も、季節によって違ってきます。その他に、ヤンバルやマナメクジやカエル類の死体を食べているのが見られています。昆虫類なども食べますが、見られる機会が少なく、どのような種類の昆虫を食べているのかがよく分かっていません。いろいろなものを食べることによって、小さな島の中で生き残ってきたと考えられます。

藪の中であたりをうかがうケナガネズミ。活動するのは主に夜で、昼間は巣穴の中で休んでいます。しっぽは体長よりも長く、先の半分くらいは白色をしています。



※※



ケナガネズミの背中の毛。茶色の短いごわごわした毛に混ざって、長さ5cmくらいの長い毛が見られます。これが「ケナガ」の由来です。

※※※

ケナガネズミの巣穴。大きな木の洞に、周辺から集めた小枝を敷き詰めて、休み場所としています。



※※※

セマルハコガメ

指定年月日:1972(昭和47)年5月15日 所在地:地域を定めず指定する

DATA

学名 *Cuora flavomarginata evelynae*

生息場所

石垣島、西表島

セマルハコガメは、甲羅の長さが17cmぐらいになる陸生のカメです。お腹の甲羅が真ん中付近で前後二つに分れ、ちょうつがいのようになってつながっています。敵におそわれると、手足を甲羅の中に引っ込めて、お腹の甲羅でふたをします。そのため「箱亀」の名前がつきました。セマルハコガメは、中国東部から台湾、八重山まで分布しますが、当初はどの地域のものも同一種としてあつかわれていました。1990年に八重山産が固有亜種として分けられ、亜種の和名はヤエヤマセマルハコガメとなりました。甲羅の形などに違いがありますが、同じ八重山産でも個体によって甲羅の形が違ふこともあるので、外見のみで確実

に見分けるのは難しいようです。

マングロープの周囲にある湿地や、山地の渓流近くでよく見つかります。昼間は林内の石や倒木、落ち葉などの下に隠れ、動きまわるのは主に夜です。ミミズやカタツムリ、落ち葉の下の小動物、草木の種や実などを食べます。陸上で生活し、水の中に入ることはありません。多少泳ぐことはできますが、上手ではありません。まちがって水に落ちたりすると、足がとどかないところだと、おぼれて死んでしまいます。





腹面の甲羅を閉じた様子



正面から見た状態

※※



腹面から見た状態

※※



沖縄島で見つかったセマルハコガメ。移入された台湾産のセマルハコガメも混在すると言われていますが、区別は困難です。

※※



宮古島城辺で見つかったセマルハコガメ。宮古島での立場は「国内由来の外来種」となります。

※※



セマルハコガメの幼体

※※

用語の解説

固有種、固有亜種

ある特定の地域でしか見られない種、亜種のことを、それぞれの地域の固有種、固有亜種と言うんだ。



カラスバト

指定年月日: 1971(昭和46)年5月19日 所在地: 地域を定めず指定する

DATA

学名 *Columba janthina*

生息場所

沖縄島(恩納村や金武町以北)、久米島、屋嘉比島、宮古島、石垣島、西表島、与那国島

その他

1993(平成5)年、国内希少動植物種(ヨナグニカラスバト)

カラスバトは、日本のハト類の中で一番大型の種類で、全長は約40cmになります。日本では東京都の伊豆諸島・千葉県から紀伊半島までの本州太平洋岸の海岸部、九州から沖縄諸島の島々に分布しています。その中で、宮古諸島と八重山諸島に生息するものは、ヨナグニカラスバトと呼ばれています。

低地の海岸林から山地の二次林のような森林内で見られ、人家近くにくることはあまりありません。冬季に1200~1900羽の集団ねぐらが観察されたり、海岸に下りて集団で塩類や小石などを食べる習性が知られていて、カラスバトの生態を考える上でとても興味深いです。赤い脚と鳴き声に特徴があり

ます。9月頃になると「ウツウツウ」とか「グルルー、グルルー」という特徴のある鳴き声を聞くようになります。その声から、沖縄島の一般的な方言では「ウシポートゥ(牛ハト)」と呼ばれます。冬期に繁殖すると考えられており、一回の産卵で一個の卵を産むと言われ、繁殖力は弱いようです。

国指定天然記念物

動物



地面に下りたカラスバト。全体的に黒っぽい色をしていることから「カラス」バトと名付けられました。羽の色は、光の具合によっては金属色に光ります。



縦列の個体で餌探しをするカラスバト。耕した後の畑に出てくるいろいろな小動物をついばみます。

用語の解説

二次林

もとの森林が伐採や山火事などによって失われた後、改めて植物が生育してできた森林。

リュウキュウキンバト

指定年月日:1972(昭和47)年5月15日 所在地:地域を定めず指定する

DATA

学名 *Chalcophaps indica yamashinai*

生息場所

先島諸島

その他

1993(平成5)年、国内希少野生動植物種

金属のような光沢のある、緑色の美しい羽をもつ鳥です。全長約25cmで、同じ先島諸島でみられるチュウダイズアカアオバトなどと比べると、全長が小さいことや色彩の違いで容易に区別できます。キンバトはインドから東南アジア、台湾のほか、日本では八重山諸島と宮古島に分布します。世界的には宮古島が分布の北限になります。また、日本のものは亜種とされ、名称は同じキンバトですが、天然記念物としては「リュウキュウキンバト」という名称で指定されています。

宮古島では1997年に繁殖が確認されて以降は、以前よりもよく見られるようになりま

した。昼間は森の中にいて、夕方になると林道や畑の周辺に出てきて、餌を探します。飛び方に特徴があり、木の高さすれすれのところを、ものすごいスピードで一直線に飛びます。地上から平均2mほどのあまり高くない枝に巣をつくり、クリーム色の卵を1〜2個産みます。

国指定天然記念物

動物



リュウキュウキンバトのオス



リュウキュウキンバトのオスと2羽のヒナ。リュウキュウキンバトは、子育てを分業することが知られており、夜はメス、昼はオスが卵やヒナの面倒をみます。

用語の
解説

亜種

同じ種内に色や形などに明らかな違いが見られるグループが存在する場合、これらを亜種として区別する。

ダイトウオオコウモリ

指定年月日: 1973(昭和48)年6月2日 所在地: 地域を定めず指定する

DATA

学名 *Pteropus dasymallus doitoensis*

生息場所

北大東島、南大東島

その他

2004(平成16)年、国内希少野生動物種

ダイトウオオコウモリは、体長25cmに達し、翼を広げると50cm以上になります。お腹の毛は茶色ですが、首から胸にかけては黄白色をしており、沖縄に分布する別亜種のオリオオコウモリ、ヤエヤマオオコウモリと比較して、白色部が広いことにより区別できます。昼間は海岸林や防風林の中にいて、木の枝などにぶらさがって寝ています。本格的な活動は夕方からです。餌を探して木から木へと飛びまわり、ハマユウなどのイチジク属や

ビロウなどの植物の実や花、葉を餌にしています。交尾は10～12月で、その後4～6月にかけて出産、6月頃には子供を抱いたオオコウモリを見ることができます。1回に生まれる子供は1匹だけです。

国指定天然記念物

動物



ダイトウオオコウモリ



※※

ダイトウビロウの葉で休んでいる昼間のダイトウオオコウモリ



※※※

オオコウモリ類は、キツネのような顔をしているので、フライングフォックスとも呼ばれます。

天然記念物調査（オオコウモリ）

天然記念物については知られてないことも多々あります。そのために特別に調査します。北大東島と南大東島には天然記念物ダイトウオオコウモリが生息しています。そのような中、1988年から1992年にかけて北大東島で調査を実施しました。島の地質、地形、植物、動物、聞き取り調査など多岐にわたる調査です。調査の結果は1992年に「ダイトウオオコウモリ保護対策緊急調査報告書」としてまとめられました。ここでは、報告書には出てない、調査にまつわるエピソードを紹介します。

三食昼寝つきの調査。なにか夢のような話ですが、実態は違います。この調査のメインは、オオコウモリに発信器をつけて夕方から明け方まで一時間おきに複数の個体の位置を特定します。約5mの大きな受信アンテナを島の3カ所の高台に設置して基地とします。受信した方向から三角法でオオコウモリの位置を特定するも

のです。調査員は、一晩中起きています。ですから、眠気との戦いです。連絡はトランシーバーを使い、会話しながら眠気をさますこともできます。午前0時ごろは夜食の弁当です。飲み物やお菓子もありますが、午前3時から4時あたりが一番きつい時間帯です。冬季はなおさらです。明け方、オオコウモリの活動が終わるとともに調査が一端終了し、朝食、お風呂、一息いれて就寝します。起床は午後5時ごろ、早めの夕食を済ませ、オオコウモリの活動が始まる前にアンテナ基地に配置につきます。6月の深夜の調査中、突然トランシーバーから「蛙の〇〇が海の方へ飛んでいる」と大きな声が入りました。そしたら、他の2カ所のアンテナ基地からも「海の方だ、発信器の音が小さくなっていく」という返事です。その海の方角は南大東島です。翌日、調査員は南大東島に向かう船に乗って島に渡り、その個体を確認しました。そして、その日の夜には再び北大東島でその個体が確認されました。オオコウモリが北大東島と南大東島の間で往復したのです。生き物のすばらしい営み、それに立ち会うができた瞬間でした。調査員のみなさん、ご苦労様でした。



捕獲後計測や健康状態をチェックして発信器を取り付けます。



西側のアンテナ基地（長崎近く） *



東側のアンテナ基地（灯台近く） *



南側のアンテナ基地 *

カムリウミスズメ

指定年月日: 1975(昭和50)年6月26日 所在地: 地域を定めず指定する

DATA

学名 *Synthliboramphus wumizusume*

全長約25cmの、ヒヨドリよりも少し小さい海鳥です。日本列島周辺や朝鮮半島南部の暖かい海で生息しており、頭部の羽を立てたときの様子が冠をかぶっているように見えることから、この名前がついています。

一生のほとんどを海で過ごし、海に潜って小魚などを食べます。陸で過ごすのは3~4月の繁殖期だけで、ヒナがふ化すると1~2日で親子ともに海に出て、子育てもすべて海の上で行います。



繁殖地を離れ移動途中の個体

*



成鳥

*



ヒナが巣立ち、海に向かう途中

*



岩の隙間の巣にいる親鳥とヒナ(日中に撮影)。ヒナは数日内には、巣立つと思われます。

*

イジマムシクイ

指定年月日: 1975 (昭和50) 年6月26日 所在地: 地域を定めず指定する

地域を定めず
指定

DATA

学名 *Phylloscopus ijimae*

ウグイスによく似た体長約12cmの小型の鳥です。

渡りをする鳥で、夏場は主に伊豆諸島の南部(三宅島・御蔵島)とトカラ列島の中之島で繁殖し、冬が近づくと南の暖かいフィリピン付近へ移動します。

沖縄では旅鳥として知られ、3~4月に北の繁殖地へ向かうときと、9月頃南へ向かう途中で見られることがあり、これまでに沖縄島、宮古島、与那国島での確認記録があります。

昆虫やクモの他、木の実も食べます。



さえずっている様子

*



体の上半分は深緑色、下半分は白っぽい色です。

*

国指定天然記念物



動物

ヤンバルクイナ

指定年月日:1982(昭和57)年12月18日 所在地:地域を定めず指定する

DATA

学名 *Gallirallus okinawae*

生息場所

沖縄島(目黒村、大宜味村、東村)

指定経緯

1981(昭和56)年12月24日、沖縄県指定

その他

1993(平成5)年、国内希少野生動物種

ヤンバルクイナは全長約35cmで、目立つ特徴は、太くて赤いくちばしと脚、胸にある白と黒のしま模様、そして赤い眼とその後ろにつづく白い線です。翼が小さいので、飛ぶことは下手です。飛ばないクイナとしては、世界で一番北の地域に生息しており、クイナ類の動物地理学や飛翔性を失う進化の観点から貴重です。

昼間は地上を歩きまわり、落ち葉の下や土の中にいる昆虫やカタツムリ、ミミズなどを食べ、夜になると木の上に上がって休みます。

繁殖期は4～8月で、3～5個の卵を産みます。ふ化したヒナは、全身黒色の毛で包まれ、すぐに親の後をついていきます。「キョキョキョキョー」というけたたましい鳴き声がよく知られていますが、「クリリー、クリリー」といった声なども聞くことができます。

方言では「アガチ」とか「アガチャー」と呼

ばれています。方言を持つ動物は、地域の人がよく知っていて、親しんでいたことを表しています。ヤンバルクイナは、地元の人たちには昔から知られていた鳥なのです。



ヤンバルクイナの親子。卵からかえったヒナは、すぐに親の後をついて歩き出します。6月ごろからは、かなりしっかりしたヒナをつれ歩く様子が見られます。

※※



枯れ木の上で休んでいるヤンバルクイナの若い個体

茂みの中の奥に産みつけられたヤンバルクイナの卵。巣は枯れ葉や落ち葉をしいただけの簡単なものです。



キシノウエトカゲ

指定年月日:1975(昭和50)年6月26日 所在地:地域を定めず指定する

DATA

学名 *Plestiodon kishinouyei*

生息場所

宮古諸島、八重山諸島のほとんどの島に生息

キシノウエトカゲは、日本に生息するトカゲの仲間では最大のもので、頭の先から尾の先端までの長さが40cmに達します。宮古・八重山諸島だけに分布する固有種です。

方言は、宮古諸島では、パービガサ、アハギザ、パービガサー、パカギア、パカギザ、パリイズ、パカギ、パカッザ、パカフレ、ヒーマバカッジャ、ハイヌグルクン、パリヌカタカス、カタカス、チナジガサ、パカグサなど、地域によって様々な呼び名があります。

また、八重山諸島では、バガビラ、バギラ、バゲーラ、ツイメーラ、マンダラハブ、キネーラ、キイネーラ、ビキイリ、ビキッラ、ビキル、ビキラー、イシミーゴーザ、ビキレ、バキィラ、ポー

ナチ、バジィラ、バズラ、バガドゥなど、地域によって異なります。

キシノウエトカゲは、海岸近くの砂地、畑、農道、林道などでよく見つかります。昼間に活動し、動きはすばやく、人が近づくとたちまち逃げてしまいます。繁殖期は3月頃で、この頃にはオス同士の追いかっこやかみ合いなども観察できます。メスは土手や倒木の下などに産卵し、卵を保護しているのが見られ、6月下旬から7月にかけてふ化した幼体が出現します。



キシノウエトカゲのオスの成体。繁殖時期になるとほほ付近が赤くなります。



幼体は、黒地に白線が目立ち、尾は青色を帯び、頭部側面から前足にかけての白帯がマダラ模様になっているのが本種の特徴です。



若齢個体。成長に伴って体色が変化します。

リュウキュウヤマガメ

指定年月日: 1975(昭和50)年6月26日 所在地: 地域を定めず指定する

DATA

学名 *Geoemyda japonica*

生息場所

沖縄島北部、久米島、渡嘉敷島

指定経緯

1973(昭和48)年12月18日、沖縄県指定

その他

2020(令和2)年、国内希少野生動物種

リュウキュウヤマガメは、甲羅の長さが13cm程の陸生のカメです。背中の甲羅後方のふちが、のこぎりの歯のようにギザギザになっているのが特徴です。沖縄島の北部では、ハーミーまたはヤマガーミーなどと、南部ではヤンバルガーミーと呼ばれています。沖縄島の北部地域、久米島、渡嘉敷島に分布していますが、外見ではどの島の個体が区別できません。近い親戚にあたる種類が、中国東南部やベトナム、マレーシアなどにいます。以前、沖縄島の南部にペットとして持

ち込まれたこともあり、産地が不明の個体が多く見られました。また、持ち込まれたセマルハコガメとの交雑個体も確認されており、**遺伝的な攪乱**を避ける意味でも島からの移動は避けなければなりません。



リュウキュウヤマガメの成体



リュウキュウヤマガメの幼体



リュウキュウヤマガメの幼体



※※



※※

(左) 渡嘉敷島産のリュウキュウヤマガメ。

(右) リュウキュウヤマガメの腹甲は全体的に黒っぽく、黄色で縁取りがあります。



※※

リュウキュウヤマガメの顔。赤身が強い個体(左)と黄色がかった個体(右)です。沖縄島の個体にも色彩変異がありますが、産地との一定の関係は見られません。



よく間違えられるヤエヤマイシガメとの区別

ヤエヤマイシガメの分布は本来八重山に限られますが、ヒトの持ち込みで沖縄島などいろいろな地域に広がってしまいました。



※※

甲らは平たく滑らかで背甲の筋状隆起や後縁のギザギザは目立ちません。



※※

腹甲は全体的に黄色で、黒っぽい斑紋があります。黒い斑紋は若い個体ほど大きくはっきりしています。

用語の解説

遺伝的な攪乱

ある生物が元々持つ遺伝情報が、人が持ち込んだ生物との交雑によって、乱されること。外見上の特徴まで変わってしまう場合もあれば、見た目は変わらなくても、遺伝子レベルで変わってしまう場合もある。



※※

これは、県内の住宅地域で見つかったカメで、セマルハコガメとリュウキュウヤマガメの交雑個体と考えられています。自然界では、セマルハコガメは八重山地方に生息し、リュウキュウヤマガメは沖縄島北部と久米島及び渡嘉敷島に生息しているので、人が持ち込まない限りこのような交雑個体が生まれることはありません。遺伝的な攪乱が広がって本来の生物がいなくなってしまう危険性もあるため、野生生物を本来の生息地以外に放すことは、絶対にやめましょう。

ヤンバルテナガコガネ

指定年月日: 1985(昭和60)年5月14日 所在地: 地域を定めず指定する

DATA

学名 *Chebrotomus janthar*

生息場所

沖縄県(国頭村、大宜味村、東村)

指定経緯

1984(昭和59)年2月16日、沖縄県指定

その他

1996(平成8)年、国内希少野生動物種

ヤンバルテナガコガネは、体の大きさはオスもメスも6cmくらいですが、オスの前足が特に長く、その名の由来となっています。オスは、足を含めた長さが15cmくらいになり、コガネムシの仲間では日本最大です。世界中で沖縄島北部、やんばるの森林だけにすんでいますが、似た環境である鹿児島県の奄美大島や徳之島では見つかっていません。どうして奄美大島や徳之島には、ヤンバルテナガコガネがいないのでしょうか。その謎は、まだ解けていません。

ヤンバルテナガコガネの仲間は、中国南部の江西省、台湾、ベトナム、タイ、マレー半島、インドなどの地域の山地に生息しています。化石は本州の鳥取県からも出土してい

ます。一番近い親戚は、中国に生息するヤンソンテナガコガネとされ、ヤンバルテナガコガネは、中国大陸と沖縄が連続きの時代に、広く生息していたテナガコガネから進化してきたと考えられています。現在の沖縄島の昆虫相の成り立ちを考える上で、ヤンバルテナガコガネは貴重なヒントを与えてくれる古い時代の生き残りなのです。



ヤンバルテナガコガネのオス(左)とメス(右)。

体の大きさはオスもメスも同じくらいですが、オスの前足は9cmくらいになり、メスよりもはるかに長いです。オスの長い足は、オス同士の争いに使います。長い足を相手の胴体の下に入れて、ひっくり返してしまおうのです。また、メスと交尾をする際には、この長い足でメスを他のオスにとられないように、囲い込んでしまいます。



卵から成虫になるまで

01 卵



大きな木の洞(空洞)の中に、一個ずつ産み落とされ、一回の産卵で10-20個の卵を産みます。昆虫類にしてはとても大きな卵で、産む数はとても少ないです。すべての卵を産むのに一週間くらいかかります。卵の直径は6mmくらいで、およそ20日でふ化して、一齢幼虫となります。幼虫は一齢から三齢までで、木の洞の中につもった腐植物の中でくらしします。三齢幼虫の大きさは6cmくらいで、大人の親指くらいの太さになります。卵から三齢幼虫になるのに、13-14カ月かかります。

02 三齢幼虫



三齢幼虫になって10-11カ月すると、木の繊維などを使って蛹室をつくり、その中で最後の脱皮をして蛹になります。

03 蛹室



三齢幼虫が蛹になってから2カ月くらいで羽化が始まります。羽化した後も成虫はおよそ6カ月間蛹室にいて、8-9月に、洞から飛びだしていきます。

04 成虫



道路で見つかったメス個体。夏になると、繁殖のために、成虫は洞から飛びだしていきます。個体は林道を横切って飛び回るため、走ってきた中になつかって落ちることがあります。ヤンバルの道を走るときには十分に注意してくださいね。

用語の解説

昆虫相

ある地域に生息する昆虫の種類のこと。どの種類の昆虫がいるかを調べることで、その地域の自然環境の豊かさや特徴を知ることができる。

フタオチョウ

指定年月日: 1969(昭和44)年8月26日 所在地: 地域を定めず指定する

DATA

学名 *Polyura eudamippus*

生息場所

沖縄島

指定経緯

指定時の名称「ふたおちょう」(所在地: 沖縄島全域)

1975(昭和50)年8月7日、現名称・所在地に変更

フタオチョウの後翅には2本のトゲのようなものがあることから「フタオ」という名前がつけられました。また幼虫の頭には2対の角のような突起があるのも特徴です。東南アジア、中国、台湾などに広く分布しますが、八重山・宮古諸島には生息せず、これを飛び越して沖縄島が分布の北限地になっています。幼虫はヤエヤマネコノチチやクワノハエノキの葉を食べますが、この植物は限られた場所にのみ生えているため、フタオチョウが見られる場所も限られています。1990年代

から、沖縄島の中南部からの目撃記録が増えています。フタオチョウの先祖は、中国西部にすんでいたと考えられています。そのため、フタオチョウがどのようにして沖縄にやってきたのかを調べると、沖縄の昆虫と中国の昆虫の関係を知ることができます。



フタオチョウ



幼虫



さなぎ

コノハチョウ

指定年月日:1969(昭和44)年8月26日 所在地:地域を定めず指定する

DATA

学名 *Kallima inachus*

生息場所

沖縄島、石垣島、西表島

指定経緯

指定時の名称「このはちょう」(所在地:沖縄県全域)

1975(昭和50)年8月7日、現名称・現所在地に変更

コノハチョウはその名の通り、^{ひら}翅の^{うろ}裏の模様が、^{かれ}枯葉にそっくりなことでよく知られるチョウです。頭を下にして止まっている姿がみられます。^{なんぽうけい}南方系のチョウで、日本では^{いし}石垣島、^{さいひょうじま}西表島、^{おきなわ}沖縄島が生息地として知られていましたが、近年^{かごしま}鹿児島県の^{あさみ}奄美諸島でも見つかっています。コノハチョウの^{ようちゅう}幼虫は、オキナフスズムシソウやセイタカスズムシソウという植物を食べます。オキナフスズムシソウは、イタジイ林の^{しつぱ}湿気の多いところに生えています。またセイタカスズムシソウは、古

^{せっかいがん}石灰岩のある場所の森に生えています。これらの植物は限られた場所に生えているため、コノハチョウが見られる場所も限られています。1980年代以降、^{いこう}沖縄島の中南部からの^{らくげき}目撃記録が増えています。



頭を下にして止まるコノハチョウ

*



幼虫

**



翅を閉じて止まると枯葉のようにみえます。

*

県指定天然記念物



動物

アサヒナキマダラセセリ

指定年月日: 1978(昭和53)年4月1日 所在地: 石垣島、西表島

DATA

学名 *Ochlodes asahinae*

生息場所

石垣島、西表島

アサヒナキマダラセセリは、石垣島、西表島の山頂部など、リュウキュウチクが生える場所に生息し、氷河時代の生き残りとも言われています。翅の色は茶色で、翅を広げると4cm程になります。5～6月に卵を産み、幼虫はリュウキュウチクの葉を食べて育ちます。そして翌年の4月頃に蛹になり、5～6月に成虫になります。このチョウの仲間は世界で13種類が知られ、アサヒナキマダラセセリ以外は中国西部からヒマラヤの寒い地域にすん

でいます。このチョウの先祖も、寒い地域にすんでいたのでしょうか。中国大陆と琉球列島が陸続きになった氷河期の頃にやってきて、その後島に取り残されたと考えられています。沖縄の昆虫類の起源を知るために、重要な手がかりとなっているチョウです。



アサヒナキマダラセセリ



リュウキュウチク

イボイモリ

指定年月日: 1978(昭和53)年11月9日 所在地: 地域を定めず指定する

DATA

学名 *Echinotriton andersoni*

生息場所

沖縄島(沖縄市以北、南城市)、渡嘉敷島、渡底島、徳之島、奄美大島、種子島

その他

2016(平成28)年、国内希少野生動物植物種

イボイモリは、頭から尾の先までの長さが15~20cmになります。その名のとおりイモリの仲間ですが、ほとんど水中に入ることはありません。胴体の左右にはイボのような突起がありますが、これは肋骨の先端です。肋骨は肺呼吸で横隔膜を動かすために重要なもので、陸上生活をする動物の大きな特徴の一つです。イボイモリの姿は、1000~2000万年前からほとんど変わっていないと言われ、はじめて水中から陸上に進出した両生類の、直接の子孫と考えられています。そのため、生きた化石とも呼ばれています。

丘陵地から山地の森の中に生息していて、カタツムリやミミズ、ムカデなどを食べます。森の中や林縁部にある小さな水流や水たまりの周辺に、落ち葉の下に埋めるようにして卵を産みます。繁殖期は3~6月頃までですが、親は11月頃まで見ることができます。普段は落ち葉の下や地面の穴の中などに隠れ

ていて、夜になると出てきます。こうした行動は雨に影響され、小雨が降る日には、よく見られます。

イボイモリの仲間は世界で3種類だけが知られています。そのうちの2種類は、中国に生息していて、イボイモリだけが琉球列島にいます。おそらく、イボイモリの先祖も中国大陸に生息していたのでしょう。数百万年以上前に、琉球列島が中国大陸と陸続きだった時に渡ってきたと考えられています。その後、琉球列島が海で隔てられて、イボイモリの先祖も鹿児島県の奄美大島や徳之島、沖縄島に取り残されてしまったのでしょう。



イボイモリの幼生。
この時期だけ水中生活をおくります。
2-3カ月で変態して上陸します。



イボイモリの成体

クロイトカゲモドキ (マダラトカゲモドキを含む。)

指定年月日: 1978(昭和53)年11月9日 所在地: 地域を定めず指定する

DATA

学名 *Goniurosaurus kuroiwae*

生息場所

沖縄島、屋我地島、伊平屋島、古宇利島、伊江島、瀬底島、久米島、渡名喜島、渡嘉敷島、河島島

その他

2015(平成27)年、国内希少野生動物種(トカゲモドキ類すべて)

クロイトカゲモドキは、トカゲのように見えますが、ヤモリの仲間です。まぶたがあるなど、ヤモリの中でも原始的な特徴を残しています。近い種類は遠く離れた中国の海南島や東南アジアに分布しており、古い時代の生き残りと考えられています。クロイトカゲモドキの種群は、**基亜種**のクロイトカゲモドキ(沖縄島、古宇利島、伊江島、瀬底島、屋我地島)のほか、イヘヤトカゲモドキ(伊平屋島)、フメトカゲモドキ(久米島)、マダラトカゲモドキ(渡名喜島)、ケラマトカゲモドキ(渡嘉敷島、阿嘉島)の合計5つの亜種に分けられています。遺伝子解析によって、沖縄島北部と南部の個体間に遺伝的な違い

があることもわかっています。体の大きさは15cmくらいで、背中にはうすいピンク色のまだら模様や金色の粉をまぶしたような模様があります。昼間は岩の割れ目や穴の中、石の下、洞穴の中に隠れていて、夜になると出てきて活動します。繁殖期は4〜8月で、その間にメスは2個の卵を2回以上産みます。卵は秋にふ化し、親になるまで2年近くかかります。



クロイトカゲモドキ (撮影地：八重瀬町) *

クロイトカゲモドキ (撮影地：西郷村) *



各地のクロイワトカゲモドキ

沖縄島国頭村



※

フロイトカゲモドキ

Goniurosaurus kuroiwa kuroiwa

写真は切れた尾が再生中の幼体

伊江島



※

伊江島産は斑紋が変わっていますが、遺伝的解析により沖縄島のクロイワトカゲモドキに含まれています。

久米島



※※

クメトカゲモドキ

Goniurosaurus kuroiwa yamashinae

渡嘉敷島



※

ケラマトカゲモドキ

Goniurosaurus kuroiwa sengokid

伊平屋島



※

イヘヤトカゲモドキ

Goniurosaurus kuroiwa toyamae

渡名喜島



※※

マダラトカゲモドキ

Goniurosaurus kuroiwa orientalis

用語の
解説

基亜種

一つの種にいくつかの亜種が存在する場合、最初に記載されたものを基亜種というんだ。



ヨナグニサン

指定年月日: 1985 (昭和60) 年3月29日 所在地: 地域を定めず指定する

DATA

学名 *Attacus atlas*

生息場所

石垣島、西表島、与那国島

ヨナグニサンはヤマユガ科の仲間で、世界中の鱗翅目 (チョウやガの仲間) の中でも最大級の種類です。翅を広げると24cmになり、翅の地色は赤褐色、暗褐色や白色の模様があります。前翅の先端は突出し蛇の顔のように見えます。インド、ヒマラヤからマレーシア、ボルネオ島、ジャワ島、中国南部、台湾にかけて分布します。日本では与那国島で初めて発見されたことからこの名がつけられました。西表島や石垣島にもすんでいます。個体数は少なく、与那

国島が主な生息地となっています。与那国島のもものは、台湾や中国南部にすんでいるものによく似ていますが、翅の模様に違いがあります。幼虫はアカギやモクダチバナ、シロウベンノキ、フカノキの葉を食べます。成虫は口器が退化しているので何も食べません。



※

ヨナグニサンのメス。
前翅の白紋は台形をしています。体も翅もメスの方がオスより大型です。



※

ヨナグニサンのオス。
前翅に大きな三角形の白紋があります。触角はメスのフェロモンを嗅ぐため発達しています。



幼虫 (左) と壺 (右)



成長した幼虫

※

※

キクザトサワヘビ

国 指定年月日:1985(昭和60)年3月29日 所在地:地域を定めず指定する

DATA

学名 *Opisthotropis kikuzatoi*

生息場所

久米島

その他

1995(平成7)年、国内希少野生動物種

キクザトサワヘビは、体の大きさが60cmくらいの小型の無毒ヘビです。久米島だけに生息していて、日本では唯一の水生生活をします。自然林内の水がきれいな溪流を生活場所にしていて、陸上に上がることは少なく、水中に潜ることが多いようです。溪流の水が少ない場所でも、水が湧き出しているような石の下などに隠れていることがあります。食性や行動など、生活内容はあまり知られていません。外国の近い仲間の生態から、小さいカニやオタマジャクシ、水生昆虫などを食べていると思われます。島内でも見つかった場所は少なく、いずれも山地溪流の厳しい環境の数百mの範囲の中です。これは現在の生息場所がなくなると、た

だちに絶滅の危機にさらされることを意味しています。

サワヘビの仲間は、フィリピン、インドネシアのボルネオ島、中国から東南アジアにかけて分布しています。その中でも、一番近い仲間は中国に分布しています。キクザトサワヘビは、琉球列島の中でも久米島という小さな島だけに生息しています。なぜこのヘビが久米島だけに生息しているのかを知ることには、琉球列島の歴史を知るヒントになるかもしれません。

水辺をはっているキクザトサワヘビ。普段は水底をはっていることが多く、水から出た時も水辺から離れることはありません。人が近づくと、すぐ水中に逃げて石のすき間に入り込んでしまいます。



*



久米島、白濁川上流の生息地のひとつ。溪流の水たまりのようになった場所の石の下などに潜んでいます。

*

ホルストガエル

指定年月日:1985(昭和60)年3月29日 所在地:地域を定めず指定する

DATA

学名 *Bufo holsti*

生息場所

沖縄島(国頭村、大宜味村、東村、本部町)、渡嘉敷島

その他

2016(平成28)年、国内希少野生動物種

ホルストガエルは、沖縄島の北部山地と渡嘉敷島だけに生息する大型のカエルです。体の大きさは13cmにもなり、方言では一般に「ワクビチ」と呼ばれています。かつては、ナミエガエルとともに、食用として売られていました。

前あしの指が4本ある一般のカエルとは異なって、前あしには5本の指があります。その第一指(親指)はトゲ状になっており、これで引っかけられるとナイフで切られたようになります。主に山地の水がきれいな溪流で暮らしていますが、山すその人家近くに現れることもあります。河川の源流近くの砂や砂利がたまった場所に、直径40cmくらいの皿状のくぼみを掘るほか、大きな岩盤のくぼみな

どを利用して、一度に800~1000個くらいの卵を産みます。繁殖期は4~11月で、最盛期は7~8月です。繁殖期の鳴き声は独特で、「ウォン」とか「オン」という声は、聞きようによっては、犬の鳴き声や人の呼ぶ声のように聞こえます。

沖縄島の南部地域からも化石が見つかることや、近い親戚にあたる種類が鹿児島県の奄美大島に生息することなどから、琉球列島の歴史を考える上で貴重なカエルと考えられています。

県指定天然記念物

動物

オスの成体。わき腹(前あしの付け根)に黄色いケロイドのような膨らみがあります。体の大きさは、少しオスが大きいのですが、見た目ではほぼ同じ大きさに見えます。



メスの成体。わき腹に黄色の膨らみがありません。



オスとメスの出会いから オタマジャクシが成長するまで

01 出会い



皿状のくぼみの中でオスがメスを呼んでいました。しばらくすると、メス(右側)がやってきました。それから長い間、オスはメスの気を引くように鳴き続けていました。

02 抱接



オスの呼びかけにやってきたメスが、くぼみ(産卵場所)を気に入ると抱接を行い、産卵が始まります。

03 産卵床



産卵床(川原につくられた皿状のくぼみ)。

04 卵



産卵床の中の卵。一個ずつ別々の袋に入っているのが分かります。

05 成長したオタマジャクシ



全長は5cmくらいになります。

06 上陸間近のオタマジャクシ



上陸は概ね夏頃に始まりますが、卵からふ化して上陸するまでにどれほどの時間がかかるのかは、まだわかっていません。

ナミエガエル

指定年月日: 1985(昭和60)年3月29日 所在地: 地域を定めず指定する

ナミエガエルは、沖縄島北部地域の山地の溪流に生息しています。あごが張った三角形の頭と、ひし形をした瞳を持つことで、他のカエルとは区別できます。川から離れたところで見つかることは少なく、たいていは半身が水に浸かった状態で見つかります。

繁殖期になると「グォツ、グォツ、ゴ、ゴ、ゴ・・・」と機関車が走り始める時のような声を出します。水辺で待ち構えていて、近くにきた昆虫やミミズ、別の種類のカエルなどを食べます。また、水中にいるサワガニ類やエビ類は、周りの砂ごと飲み込むようで、しばしば糞の中から砂粒と一緒に食べたカニやエビのツメが出てきます。ホルストガエ

学名 *Limnonectes namiyei*

生息場所

沖縄島(国頭村、大宜味村、東村)

その他

2016(平成28)年、国内希少野生動物種

DATA

ルとともに、沖縄島のカエルでは長生きする種類と考えられています。これまでの調査では、上陸してから5年間生存していた個体が確認されています。

ナミエガエルに近い種類は、台湾以南の熱帯地域に広く生息していますが、ナミエガエルだけが八重山諸島や宮古諸島を飛び越えて、沖縄島だけに生息しているのは、琉球列島の島の歴史を考える上からはとても興味深いことです。

ナミエガエルのオス。体の大きさは10-11cm、ごつごつした肌、ずんぐりむっくりした体形をしています。頭の後ろに大きなこぶのような盛り上がりが目立ちます。



※



*

石の間にかくれるメス。体長はオスと同じくらいですが、体形は少し丸みをおびます。繁殖期(4月から7月)に、卵を持っている個体は、一層丸みが強くなります。



卵から カエル(成体)になるまで

01 卵



※※

水のたまった浅い泥地にばらまきように産み落とされた卵。泥に包まれた丸いつづつが一個の卵です。

02 ふ化



※※

ふ化したオタマジャクシ。頭の両側にエラが見えるので、ふ化してまもないことが分かります。

03 成長したオタマジャクシ



※※

大きくなったオタマジャクシ。ふ化してから40日くらい経っています。あごの両側にある白い斑点が特徴で、他のオタマジャクシとすぐ区別できます。

04 カエルになり上陸する



※※

上陸して、石の上で休むナミエガエルのこども。体の大きさは8-10mmです。産卵してから約90日でオタマジャクシは上陸して陸上生活に移っていきます。

05 成長したカエル



※※

リュウキュウアカガエルを捕まえた亜成体(体長約70mm)。あまり自分と変わらない大きさのカエルを丸呑みしてしまいました。

イシカワガエル

指定年月日: 1985(昭和60)年3月29日 所在地: 地域を定めず指定する

DATA

学名 *Odorrana ishikawae*

生息場所 沖縄島(国頭村、大宜味村、東村)

その他

2016(平成28)年、国内希少野生動物種(オキナワイシカワガエル、アマミイシカワガエル)

イシカワガエルは、体の大きさが10～13cmになる大型のカエルです。日本のカエルの中では、もっとも鮮やかな色をしています。イシカワガエルの仲間は、鹿児島県の奄美大島にも生息していますが、2011年にそれぞれ別種になり、沖縄島のものはオキナワイシカワガエル、奄美大島のものはアマミイシカワガエルと名付けられました。イシカワガエルの仲間は、世界中のどこにも親戚にあたる仲間が見あらず、生きた化石と呼ばれています。

沖縄島では繁殖期は11～4月で、北部の山地では12月頃からあちこちの谷間から、鳥の声ともネコの声ともつかない独特の鳴き声が聞こえてきます。オスがメスと呼んでいる声です。うまくメスと呼ぶことに成功したオ

スは、ゆっくりと時間をかけて巣穴の中へ誘導します。巣穴は山地にある水のきれいな溪流沿いの岩の割れ目や土手の穴などで、サワガニが掘った穴も利用します。卵はその穴の中の水たまりに産みます。オスの中には、毎年同じ場所にやってきてメスと呼んでいることなども分かってきました。とても変わった生態を持っていますが、詳しいことは分かっていません。環境の変化にはとても敏感で、生息場所である溪流に土砂などが流入すると、すぐにいなくなってしまう。



溪流周辺の岩の上にすわるイシカワガエルの成体



オスとメスの出会いから オタマジャクシが成長するまで

01 出会い



※※

上にいるオスが鳴きながら、
下にいるメスを巣穴へ誘導し
ています。

02 抱接



※※

巣外での抱接。通常は巣穴の中で抱
接し産卵していると思われます。
巣外の抱接はとても珍しいことです。

03 卵



※※

土手の巣穴の中に産み付けら
れた卵。白い色をしていて、
尾がでかかっています。

04 成長したオタマジャクシ



※※

オタマジャクシは、成長する
と全長が5cmを超えます。尾の
付け根が黒いことが特徴です。

05 上陸間近のオタマジャクシ



※※

ふ化してから、ここまでどれだけ
の期間がかかるのかは不明です。

哀しく消えた名護のイシカワガエル

イシカワガエルが1985年3月に県指定の天然記念物になったことは、この本(184ページ)で紹介したとおりです。ところが、県の指定に先立つこと12年も前に、イシカワガエルを天然記念物にしたところがあります。名護市です。当時としては、全国的に見ても、カエルの天然記念物指定はあまり例がありませんでした。たまにあつたとしても、「〇〇池の××ガエルの繁殖地」というように、場所とセットになって、たくさん集まることが指定の条件になることが多かったのです。夜行性で、お世辞にも一般にお馴染みとはいえないカエルを天然記念物に指定することには、さぞかしの思い入れがあつたことでしょう。

名護市がイシカワガエルを天然記念物にした理由は、ヤンバルという地域の歴史(名護市民にとっては自分たちの暮らしている場所)を考えるうえで重要な種類だからということでした。まさにイシカワガエルの存在そのものが、ヤンバルの自然を考えていくためには貴重な存在だということです。その意味で県に先立つ指定を行った名護市の決断は、とても評価されるものです。

そもそも名護市にイシカワガエルがいるということは、いつ頃から知られていたのでしょうか

か。戦前には源河や源河近くの浸流などで採集されていた記録があります。戦後になつても、しばらくは源河川の支流などで採集された記録があるようです。しかし源河以外の場所ではあまり記録がありません。1975年に実施された名護市動植物総合調査によると、源河川支流と三原志根垣川上流で確認されています。その後調査を行った調査員によると、大浦川の支流や源河川の最上流部にあたるオーシッタイ周辺でも見つけ、名護市が沖縄県におけるイシカワガエルの南限地であることが明らかになりました。こうした発見が、名護市の指定を大きく後押ししたのでしょう。

名護市は1988年から二回目の動植物総合調査を実施しました。ところが、この時には、先の発見地でイシカワガエルは発見できませんでした。1980年代に羽地川の上流で記録されたのを最後に、名護市内では目撃されていません。天然記念物に指定されたら、みんなは安心するかもしれませんが、いろいろな理由で、天然記念物に指定されても、いなくなってしまうことはあります。先見性的な指定を行った名護市の誇りを消してしまわないように、私たちが考えていくことは、たくさんあるような気がします。



名護市源河川の支流で見つかった若い個体
1975年9月21日撮影



三原志根垣川で見つかった幼体
1975年10月10日撮影